

*In all things of nature there is something of the marvelous.*

--Aristotle

私は、森のなにげないたたまいに強く惹かれる。

森に呼びかけられているような、手招きされているような、不思議な感覚。森との交歓、とでもいえばいいのか。なにかそういうものによって、私は写真を撮り続けている。

その原点は、おそらく私が、国土の70%を山と森に囲まれた日本に暮らす、日本人だということにある。

山の国・森の国の風土の中で、日本人は自然の恩恵を受け、それゆえ大切にし、敬う長い歴史と伝統を連綿と受け継いできた。とはいえ、地球規模の環境変化が憂慮される現代、日本でも特に都市では、急激な高度成長の陰で自然と人との共生の連鎖は断たれて久しい。

私自身、40年近く大都市東京の中だけで生きていた頃は、森への親密感を抱くことなどなかった。が、その後10年間、自分の手で森の中に家を建てた経験によって、自然に対する意識が覚醒する。

時計が刻む音よりゆっくり流れる森の時間は心地よく、自らの身体を使った家造りを通して、私は結果的に先人たちの生き方を踏襲した。そうする間に、日本人としての遺伝子に潜んでいた自然への憧憬、感謝、畏怖の念が、魂の壁に刻み込まれていったのだと思う。

そして私は、写真に開眼した。

私にとって写真は、自然から与えられる大いなる恵みのひとつにほかならない。環境破壊の広がり、私の写真を困難にしているのは確か、1日10時間以上歩いても徒労に終わり、地図上にはあるはずの森がダム工事現場だったこともある。しかし、そこで諦めなかったおかげで、森の巨人たちにも出会ってきた。たとえば、曲がっていて役に立たないという理由で、伐られる難を逃れて成長し続け、数百年生き続けている巨樹など。

やがて、手つかずの森を彷徨い続けるいっぽうで、私は、「都市の森」にも惹きつけられていく自分に気づく。そのほとんどが人工的に造られた自然でありながら、都市という環境にあってもなお、人間の、自然と共に生きたいという根強い欲求の名残りを、たしかに垣間見ることができる。コンクリートジャングルの真んまん中、ニューヨーク・シティーのセントラルパークは、その典型的な場所のひとつだ。そこでも、森の奥へ分け入る時と同様に、私は樹々が語りかけてくれる声に耳をそばだてる。願わくば自然の本性を聴くことができたらと。

ドキュメンタリーフィルムのように、樹の年輪は1本1本の樹が生きてきた間の出来事をつぶさに記録しているにちがいない。そういう姿をじっと見つめ、見ている自分を見つめて、私は1度だけシャッターをきる。

一期一会の写真。私の写真は自然にそうなった。自分が撮っているのではなくて目の前の自然に撮らせてもらっている彼らの肖像。それが、地球へのレクイエムにならないことを祈りたい。

志鎌 猛